

病は氣から！ 物怪から！

悩んで悩んで病氣になつてしまふ！

◎悩んだり病氣になつたり治つたり

なやむ(悩む) く病氣で苦しむ・わずらう・困る

わづらふ(煩ふ) くあれこれ氣を使つて悩む、苦しむ・病氣になる

こうず(困ず) く悩む・苦しむ・困る・体が弱る・病が重くなる

※同音「斃ず」は『死ぬ』の尊敬語で「お亡くなりになる」の意

ながむ(眺む) く物思いに沈む・ぼんやりと見る

※和歌では連用形「ながめ」を「長雨」に掛けて使うことが多い(掛詞)

※同音「詠む」で「詩歌を朗詠する」の意

おもふ(思ふ) く考える・回想する・望む・愛する・嘆く・悩む・予測する

ものおもふ(物思ふ) く思い悩む・思いにふける

おこたる(怠る) く病氣がよくなる・快方に向かう・なまける・とぎれる

※病氣になるのは物怪が憑りついたせい。だったら、物怪が怠けたら病氣治るよね！

Ex.

よき女のなやめるところあるに似たりをうな

↓美しい女性が病に悩んでいるところがあるのに似ている

にはかにわづらふ人のあるに、せんざ験者求むるに

↓急に病氣で苦しむ人がいるときに、せんざ験者をさがしたところ

夕月夜のおかしき程に、出だしたてさせ給ひて、(最高歌語)やがてながめおはします

↓夕方の月の趣深い頃に、出発させなされて、そのま物思いにふけりながら(夕月)を見ておいでになる

花の色は 移りにけりな いたづらに 我が身世にふる (長雨・眺め)ながめせし間に

↓桜の花の色はすっかり色褪せてしまったなあ。むなしく日を過ごし、長雨が降り続いていた間に。(私の容色はすっかり衰えてしまったことだなあ。むなしく恋に時をすごし、物思いにふけっている間に)

※「花の色」には「容姿の美しさ」もとえられている。「世にふる」の『世』には「男女の仲」の意味が含まれてもいる。